

自然と子どもの育み

奈良教育大学附属自然環境教育センター公開講座「親子で夏の森を楽しもう」の12年

前迫ゆり（大阪産業大学大学院人間環境学研究科）・伊藤ふくお（伊藤ふくお自然写真工房）

Nature and Child's Growth

Twelve years of the open lecture carried out in Education Center for Natural Environment, Nara University of Education: "Let's enjoy a forest of the summer with parent and child."

Yuri MAESAKO (Graduate school of Human Environment of Osaka Sangyo University)・
Fukuo ITO (Ito Fukuo Nature Photo Studio)

はじめに

「国連・持続可能な開発のための教育の10年」(United Nations Decade of Education for Sustainable Development: UNDESD)が2005年からはじまっている。ユネスコ、関係省（環境、文科、外務）、NGOが協力して環境教育に取り組んでいるところであり、これについては外務省のHP (http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/kankyo/edu_10/10years_gai.html)や朝岡（2005）などに詳しい。朝岡（2005）は「自然と人との関係性」について、自然自身が人間との外的・内的相互作用をもち、コミュニケーションの相手として成立するとしている。上野（1999）は、保育をめぐるすべてを含めた発達環境も含めて「環境」ととらえ、とりわけ、自然は、子どもの生活に欠けがちであると指摘している。心理学者の河合（1998）は著書「子どもと環境」において子どもの環境が破壊されていることを嘆き、「子どもと自然」や「森に還ろう」を著した動物学者の河合（1990, 2003）は、子どもの健全な発達において自然とのかかわりが不可欠であるとしている。

著者は、子どもの健やかな「心の育ち」という視点から、野外における子どもの遊び環境の調査を通して、自然と子どもとのかかわりの重要性を指摘している（前迫, 2007a, b; 前迫ほか, 2004, 2008）。子どもの遊びにデジタル世界が浸透する現代において、日常生活のなかで、子どもが生命の基盤としての自然とかわる機会が著しく減少している。さらに文化的伝承が途絶えつつある今日、自然への気づきや感動は、子どもの成長にとってますます重要な意味をもつと考えられる。

自然とのかかわりが子どもの育みにおいてどのような意義をもつのかを検証するのは容易ではないが、1997年7月にスタートした奈良教育大学附属自然環境教育センター主催の公開講座「親子で夏の森を楽しもう」において、2008年7月まで12年にわたって講師をつとめる機会を得たことから、同プログラムをふりかえることで、「自然と子どもの育み」を考えたいと思う。

自然環境教育センター前田喜四雄先生と鳥居春己先生には、公開講座の機会を与えていただき、本講座がゆったりとした時間のなかで実施できるよう配慮いただくとともに、同プログラムのスタート時の議論を大切にしながら、12年にわたり講座を担当させていただいたことを深謝する。講座にご協力いただいた丸山健一郎氏、講座に参加された親子のみなさま、そして講座の円滑な運営に努められた同大学事務職員・大学生のみなさまに厚くお礼申し上げる。

奥吉野実習林の自然

キャンプのねらいは、「自然に親しむ」ことに加えて、テントの設営や炊事などの共同作用を通して、協調の精神を養うことへの期待度も含まれている（公開講座配布資料より）。しかし本

講座の最大のねらいは、自然や生きものの姿を自分たちの目でとらえ、自然や生きものに対しての「驚き」や「おもしろさ」を親子で共有してもらうことではないかと思う。

同センター奥吉野実習林の自然と生きものについては、「奈良教育大学附属演習林の自然」（奈良教育大学附属演習林の自然研究班編，1991）および北川（1994）ほかの「奈良教育大学自然環境教育センターの自然」に詳しい。また森林植生については、前迫（1998, 2000, 2002）に詳しいので自然に関する詳述を避けるが、宿舎付近のクヌギ・コナラ林には、子どもたちに人気のクワガタムシ類やカブトムシが多く生息する。運がよければ、テントサイトにかけられた巣箱に、ムササビが戻ってくる。2日目に登山を設定しているシャクヤク沢にはサンショウウオ類の幼生やサワガニなどが子どもたちを迎えてくれる。直接出会う機会は少ないが、森林には、ノウサギ、リス、カモシカ、シカ、イノシシ、キツネ、テン、クマといったほ乳類が記録されている（前田，1991）。近年、シカによる樹皮剥ぎや採食などが盛んである。この12年で森林が一番変わった点は、森林へのシカによる影響が大きくなったということかもしれない。

公開講座のプログラム

1. 第1日目：テントとかまどの確保

奈良県五條市大塔町（旧吉野郡大塔村）赤谷に位置する奈良教育大学附属自然環境教育センター奥吉野実習林（以後、センター）での第1回公開講座は、1997年7月22日（金）から24日（日）の2泊3日の日程で始まった。以後、毎年ほぼ同時期に実施されている。第1回目は子どもたちだけを対象としたが、2回目以降、親子での参加形態をとっている。対象学年は原則として小学生以上である（兄弟参加などの場合、幼稚園児も受け入れている）。スタッフは同センター教員2名、われわれ講師2名、大学生5名程度。参加人数は5～8組程度（親子10～15名）であるので、参加者のペースにあわせた活動ができる点がこの講座のよいところである。

朝、9時にバスで奈良教育大学を出発し、昼前にセンターに到着する。車中、いくつかの注意点やプログラム紹介をする。つづいて参加者およびスタッフの自己紹介を行う。揺れる車中でマイクをもちながら子どもたちが自己紹介する時間は、楽しいオープニングセレモニーでもある。

第1日目は、昼食（持参した弁当）後、まずテント設営を行う（図1，2）。支柱をたて、ロープをはりながら、クラシックな黄色の三角屋根のテントを張るのは、案外むずかしい作業である。杭を打ち、ロープをはってフライシートをかける。雨に備えて溝を掘れば、できあがりである。たっぷり1時間はかかる。

つぎに、かまどの設置である。なにもないところに、石を組んだり、穴を少し掘り、家族単位でかまどをつくる（図3，4）。もうひとつ重要な準備に、かまど用の燃料づくり、つまり薪割りがある。テント設営を親子でとり組んできた子どもたちは、ちょっと疲れ気味になる頃であるが、薪割りになると、また張り切る。怪我をしない薪割りのコツは、上から斧を振り下ろさず、薪の上部に斧をあて、上から斧を木槌でたたくという薪割りの基本を前田先生から伝授され、さっそく実行。子どもたちはたちまち薪割り名人となる。

自分たちの生活の場を確保した後、テントサイト前の川原樋川で魚釣りと川遊びを行う（図5，図6）。魚釣り用の竿は既製品以外に、伊藤による手作りの竹竿も準備される。針の付け方まで詳しく習う。魚釣り用の餌は現地調達。石を裏返せば水生昆虫がそのまま釣り餌となる。子どもたちはもちろん、みんなが夕食用の魚釣りに夢中である。

川遊びとして、カヌーが川まで運ばれる。魚釣りとカヌーに興じる頃、子どもたちは太陽が空にある限り、思いっきり川を楽しむ。と同時に、石の裏にたくさんの水生昆虫が棲むことや魚の餌になることを知る。河原に落ちているほ乳類の骨格をみつけることができるのも、このフィールドの楽しさである（図7）。川で遊び、川を知り、子どもたちのフィールド生活第1日目が過

ぎてゆく。

夕食は、どうしても代表のみが手を動かすことになってしまうカレーライス以外のメニューにしようという発想から、ハンバーグか餃子を作ることにしている。かまどで火をおこすところから、親子の共同作業がはじまる。なれない手つきで、野菜をきる子どもたちの目つきは真剣である（図8）。しかし捏（こ）ねる作業は楽しい（図9）。子どもたちの汗の塩味もきいた？おいしいハンバーグができあがる。

夕方になるとブラックライトが設置される（図10）。ブラックライトにはたくさんの昆虫が集まるが、なんといってもミヤマクワガタのオスは人気である（図11）。夕食後、懐中電灯をもって、夜の生きもの観察も行われる（詳細は後述）。テントサイトが静かになるのは、夜10時を過ぎた頃である。

2. 第2日目：森林と川をたのしむ

朝起きると、まず、かまどの火をおこす。家族毎にかまどで朝食（ご飯、目玉焼き、とうふのみそ汁）をつくる。2日目はシャクヤク沢まで標高差約400mの山登りが待っている。テントサイトのあたりは暖温帯林を伐採し、スギ林となっている（図12）。登りながら、スギ林に生育するツクバネガシ、クロモジ、シキミ、ズイナ、ユズリハといった特徴的な植物を紹介するが、登り口がスギ・ヒノキ林で傾斜が急であるため、登り始めて早くも疲れが出そうになる。この森林を活用し、スギを伐採し、1m毎の円盤をつくり、年輪解析をする（図13）。子どもたちには、ちょっと難しい作業であるが、ここでも保護者の方や大学生がサポートし、無事、年輪解析を乗り切る。

十坪平でミズメのサロメチールの香りを嗅ぎ、気合いをいれる（図14）。実習林最大のトチノキ樹洞に到着すると、子どもたちは一気に元気になる（図15）。トチノキの樹洞に入り、木に登る。シャクヤク沢の溪谷まで、もうひと息。ミズナラ林、シャクナゲ林、イヌブナ林などを通りながら、シャクヤク沢まで歩くと、フサザクラ林にたどりつく。この谷にはイワタバコ（図16）や毒草のトリカブトも生育するが、残念ながら開花期ではない。ホウキタケ、イグチ類などのキノコ（図17）も豊富である。

溪谷の水を飲み、水道水とは違うおいしさを味わった後、子どもたちは両生類の幼生やナガレヒキガエルなど（図18）の生きもの観察にエネルギーと好奇心を発揮する。生きものをみつけるたびに、子どもたちは元気になる。ひとしきり沢で遊んだ後、2時間以上かけて登った山を子どもたちはあっという間に下山する。テントサイトに午後2時頃に戻る。登山の疲れはスイカで吹き飛ばし、少しハンモックでくつろいだ後（図19）、子どもたちはまた川遊びにでかける。

2日目の夕食はバーベキューである。この頃になると、親は子を忘れ、子も親を忘れ？、子どもも同志、また親同志もうち解け、森と川の風に吹かれながら、仲間たちと宴を楽しむ。

夜八時頃、子どもたちが主役となるプレゼンテーションと講師による森の話が始まる。子どもたちは、OHPシートや標本を使いながら、当日の森の報告をする（図20, 21）。人前で話することが苦手な子どもたちもいるが、子どもたちは、森や沢で見つけた動植物について一生懸命語ってくれる。その視点はするどくもあり、聴衆一同、拍手をおくる。発表会は無事終了。その後、夜10時過ぎまで多彩な講師陣による話は続く（図22-24）。

3. 第3日目：流しそうめんと後かたづけ

いよいよ最終日。いつものように、かまどに火をおこし、朝食をつくる。メニューは名物のホットドッグである。パンにキャベツとフランクフルトをはさみ、銀紙に包むのは子どもたちの役目である。それを、昨日のバーベキュー用ドラム缶で暖める。時折、暖めすぎて黒こげになるも

のもある。電子レンジも電気もないフィールドならではの朝食である。

テントと食器類の片づけとトイレの掃除は最後の大仕事である。掃除後、時間に余裕があるときは、また遊ぶ。葉っぱで遊んだり（図25）、ネイチャーゲームをしたり（図26）、子どもたちの要望にあわせてプログラムは変わる。その間に、親とスタッフは、流しそうめん用の竹の節をとる。難しい節とりを手伝う子どもたちもいる。

いよいよ、昼食。二階から、水とそうめんを流す。必死でそうめんをすくいあげる子どもたちの歓声が響く（図27）。ひとしきり食べ終わると、つぎは子どもたちが、そうめんを流す。今度はおとなたちの笑い声が響く。

最後に記念撮影（図28）。森の空気をいっぱい吸って、参加者もスタッフも自然からエネルギーをもらって、三日間の公開講座は幕を閉じる。

地域の自然と子どもたち—昆虫写真家の視点から—

1. 1999年の公開講座：キリギリスを捕らえる

前年度あたりから、道路を境に施設の北側にある整地した敷地内に、ヨモギやヒメジオン、数種のイネ科植物などが繁茂した草むらが出現したのである。当然、バッタやコオロギ、キリギリスなどが棲みついた。これは、絶好のチャンス。キリギリス採りを子どもたちにやらしてもらおうと思い準備をして望んだ。

子どもの頃、チョン ギース と鳴くキリギリスは、なかなか捕まえることのできないステイタスの高い遊び仲間であった。捕虫網なんて高級なものは無かった。かろうじて、お金持ちの息子が魚とりの網を持っていた頃で、当方の捕虫網は日本手ぬぐいで作った虫取り網だ。これでは、セミやトンボくらいは捕まえられても、草むらで鳴くキリギリスは、まったく捕まらず悔しい思いをした。それでも、草むらを踏みつけて何とかキリギリスを採ったときは、とても嬉しかった。しかし、そうして採って虫かごに入れ家の軒先に吊るして、鳴き声を聞こうとしても直ぐに死んでしまった。

社会人になってから、虫友達から、トラップを使って採集する方法を教わった。その方法は、タマネギを使うものであった。やり方は、至って簡単で、鳴いている雄や、草の間をウロウロしている雌を見つけたら、刺激をしないように棒の先端につけたタマネギの欠片を近づけてやる。タマネギに気づいたキリギリスは、大好物の餌だとばかり食らいつく、そうなる絶対食らいついたタマネギを放そうとはしないのである。あとは、そのタマネギごと虫かごに取り込めば良い。これを、実習林の草むらで子供たちと一緒にやった。が、上手く捕まった子は2人くらいだったと記憶している。どうやら、鳴いている雄を見つけるのが難しいらしく、時間が経過するにつれ飽きてしまった。何も、それをどうしても捕まえようといった遊びではないので、飽きた子は、違う遊びを始めてしまった。日差しがきつい、日向でのキリギリス採りだから子どもたちの自由意志にまかせてその場は解散となった。タマネギをつけた棒や、捕まえたキリギリスを入れる牛乳パックで作った虫かごなどを放置して次の遊びに行った子もいた。やや時間をおいて、それらを片付けに行き驚いた。タマネギを入れた牛乳パックの虫かごに、キリギリスの雌が1個体入っていたのである。鳴いているキリギリスを見つけることは子供には難しいことらしい。しかし、トラップとして使えることがわかり、瓢箪から駒の思いだった。

キリギリスと同じ直翅目の仲間、川原樋川の河川敷には、カワラバッタと呼ばれているバッタが棲んでいる。トノサマバッタと同じ体型をしているカワラバッタの身体は、河原の小石と同じような色と模様をしている。それが、小石の間でじっとしていると、隠れ蓑をまとった忍者同様、私たちは、とても発見することはできない。しかし、人が近づくと危険を察知して、ぱっと飛び立つ。飛ぶために羽ばたいた後翅には、鮮やかな青と黒いラインがあり、とても綺麗に見

える。だから、カワラバツタを見たければ、河原をバタバタと動けばよい。カワラバツタがいれば驚いて飛ぶから発見は簡単だ。ちなみに、カワラバツタは奈良県レッドデータブックでは、希少種に扱われていて、どこの河原にも棲むバツタではないのだ。

2. 2001年の公開講座：落雷

川原樋川での川遊びは、子どもたち誰もが楽しみにしているカリキュラムの一つだ。カヌーや泳ぎに専念する子どももいるが、魚釣りも人気がある。普通は、釣竿や仕掛けなどは、事前に調達するのだが、この魚釣りが少し変わっている。テグス、浮、オモリ、釣り針など魚つりに必要な最低限のパーツはそろっている。釣竿と餌は各自に調達させる。因みに、釣竿は手ごろな木の枝や、メダケ（スズンボ）などを使う。餌は、川にいるヒゲナガトビカワゲラの幼虫だ。釣竿に仕掛けの用意ができれば、川の瀬で小石をつづって巣をつくっているヒゲナガトビカワゲラの幼虫を探し餌にする。川原樋川には、アマゴ、オイカワ、アユ、アブラハヤ、ヨシノボリなどが棲んでいる。ヒゲナガトビカワゲラの幼虫を餌に使うと、アブラハヤがよく釣れる。時には、ご飯粒でも釣れるからアブラハヤは悪食と言える。増水してまったく釣りができない状態の年もあった。逆に、2008年は、増水により水溜りのようになったところで、アマゴなどを手づかみできたこともあった。思えば、私が始めて川原樋川を訪れたのは、35年も前になる。友人に鮎つりに誘われてきたのだが、現在より川床は下にあった。岩もごつごつ出ていて、溪流だった。その時代にも増水や増水はあったように思うが、現在のように激しいものであったのか知りたいと思う。「盆過ぎの川原樋川は、アブに殺される」は釣り人たちの言い伝えで、それほど、自然豊かな川であることも確かだ。

釣った魚は、すべて食べる。腹を割き、腸を出して、から揚げにする。釣りも調理も子供たちが主体で取り組むのが好ましい。一度経験している子供は、何をすればよいかわかっているのが良いが、経験のない子供は魚の腸を出すことに最初抵抗があるようだ。しかし、2～3匹さばけば慣れ、それなりに、包丁の使い方も上手くなる。小学生の男子より女子の方が、慣れが早いし上手くなるのは、人間に備わっている、男女の本能だろうか。

この年は、初夏から夏にかけてとても天候の不安定な年だった。連日、午後になると積乱雲がわき、雷とすごい雨が降った。1日目テントの設営を終え、かまどの準備も整い川遊びに出かけた。その頃から雲行きが怪しく、河原にいと暖かい風と冷たい風が交互に吹くのが判った。遠くで雷が聞こえ出した。そろそろ、子供たちを水からあげて、安全な場所にと考えてだした時、ポツッ ポツッと大粒の雨が降り出した。稲光と雷鳴のタイムラグが縮まってきて、雷も近づいてきている。危険な状態になってきたので、全員川から上がり、堤防近くまで移動、低い灌木の間で身を寄せ合い、雷と雨が行き過ぎるのを待った。長い時間のように感じたが、おおよそ10分ほどそうしていた。数回、稲光と雷鳴が同時だった時があり、近くに落雷したようだ。やがて、稲光と雷鳴の間隔が10秒以上になり、雨も小やみになった。ようやく、全員ずぶぬれの身体のままだったが、無事に施設まで帰ることができた。電柱や、高い樹木から離れて身をかがめていたのだが、このわずか10分間が、永遠の時間に感じた。

3. 2006年の公開講座：テングチョウの越夏

毎年、講座2日目にある重要なカリキュラムとして、標高差約400mの山登りをしながら自然観察をする。標高680mある十坪平と呼ばれている休憩所までの登山道は、胸突き八丁のとても急な、杉や桧が植林された森の中を登る。ようやく、十坪平付近までくるとミズナラやイヌブナなどの大きな樹木が現れる。十坪平から標高差120mほどの登山道は、ブナ、イヌブナ、ミズナラ、ウラジロガシ、ホオノキ、トチノキ、モミなどの大きな樹木の森を、登山道に落ちた葉っぱ

や、キノコなどを観察しながら進む。時折、センチコガネ、シデムシなどの甲虫が林道上を、動物の糞や死体を捜しながら飛ぶ姿が観察できるから楽しい。尾根筋に出るとトチノキ回廊はもうすぐだ。さらに尾根筋を山頂へと向かう道とトチノキ回廊へ入る道の分岐にくるともう登りはない。あごを出しかけていた子供たちも元気を取り戻すところだ。

トチノキ回廊に入ると胸高直径60cmほどのイヌブナが迎えてくれる。若い樹木ながらヒメシヤラも多い。トチノキ回廊最大のトチノキに会うには、登山道から急斜面を50mほど下る。根際は、4畳半もあろうかと思うほど大きな樹洞になっていて、マダラカマドウマの大群が子供たちを驚かせる。午前8時30分ころ出発した一行は、正午頃ようやく目的地のシャクヤク沢に到着する。ここで、美味しい谷川の水でのどを潤おしながら昼食をとるのが、通例となっている。沢の小石を起こしていくと、サワガニや、オオダイガハラサンショウウオの幼生を観察することができる。時々、マムシやヤマカガシなどを見ることもある。沢の周りには、サワグルミ、アワブキ、ヤハズアジサイなどが気持ちのいい森を形成している。

2006年7月22日、これまでの年と同じように沢まで上り昼食をとっていたとき、見上げたアワブキの枝先に、チョウがとまっているのを見つけた。それは、テングチョウとすぐに判明。越夏（暑すぎる夏をやりすごすのをこのように言う）のためにシャクヤク沢の涼しい林内にやってきたと確信した。成虫で越冬するテングチョウは、この時期、1世代目の成虫が現れその成虫は、夏の期間休眠に入るこの時期の休眠を越夏と呼び、2世代目の成虫が過ごす冬の時期の休眠を越冬と呼んでいる。越冬の場合、観察例の多くは、常緑広葉樹の枝に溜まった枯葉や、それがボール状になった枯葉ボールに寄り添って冬を越す。越夏の場合、観察例の多くは、風の通る涼しい林内の枝に制して過ごす。私たちは、偶然にそのテングチョウが越夏している姿を観察できたのだ。これはめったとあるわけではない。毎年同じ時期にこのシャクヤク沢に来ているが、過去に例がなく、以後2年間も観察できていない。

成虫で越夏する蝶は他にもいる。幼虫はテングチョウと同じ、エノキを食べるヒオドシチョウがそうだ。越夏する姿はテングチョウと違い、ヒオドシチョウは物陰に隠れる。例えば、溝ぶたの下、石垣の隙間、倒木の下など、こんな所にどうして入ったのだろうと首をかしげるような狭い場所もある。もう一つ、重要な条件がある。それは、標高が高いこと。凡そ、1,000m以上の山の山頂部や、稜線が越夏に選ばれる。奈良県では、大台ヶ原（日出ヶ岳標高1,694m）や和佐又山（標高1,344m）で越夏の記録がある。演習林でも山頂部は1,186mあるから、ヒオドシチョウが越夏しているかも知れない。

4. 恒例の公開講座：夜の昆虫採集

夜行性の昆虫を捕まえる方法に、ライトトラップ法がある。昆虫好きや、研究者は、紫外線に近い波長の違うライトを数種類用意して、日暮れと同時にそれを点灯し、白い大きな幕をそこに垂らして、ライトに引かれてやってきた虫をとまらせて捕まえるのだ。講座では、ブラックライト、誘蛾灯、蛍光灯と波長の違うライトを用意して虫を観察する。子供たちのお目当ては、カブトムシやクワガタムシの仲間である。「親子で夏の森を楽しもう」を始めた頃よりも、最近カブトムシやミヤマクガタやコクワガタが増えたように感じられる。施設の北側にある広場に植栽したクヌギが、虫たちに樹液を提供できるまで生長したことや、その落ち葉が適当な腐葉土をつくり少しずつ環境が変わってきたからだとは私は考えている。

30年ほど以前、赤谷より数キロ上流の川原樋川沿いの森林が広範囲伐採された。有用な樹木のみを搬出し、不必要な樹木は伐採されたまま放置された。それは、膨大な量であった。数年して一所に集められた伐採樹木が朽ちだすと、カブトムシが大発生し、虫好きな仲間たちが、毎日大きなコンテナに数杯ずつ採ったことがあった。このようなことは、楽しいがあまり起こっては

ならないことだ。でも、カブトムシやクワガタムシの仲間がたくさんいると楽しい。実習林の広場に植栽したクヌギなどが大きく成長し、それなりの環境ができると楽しい昆虫採集ができそうである。

さて、ライトトラップだが、毎年欠かさず飛んでくるのが、コガネムシの仲間では、ドウガネブイブイ。ガの仲間では、オオミズアオだ。夜行性ではないが、ニイニイゼミやヒグラシと言ったセミの仲間も集まってくる。用意したライトトラップ以外に、赤谷には虫を集めるライトがある。赤谷川にかかる橋の両側に設置された水銀灯が2基。大塔村が経営する、キャンプ施設に設けられた自動販売機。岩をライトアップするためのサーチライト。以上が夜間の昆虫採集のポイントである。橋にある2基の水銀灯の下には、時としてクワガタムシの仲間やカミキリムシの仲間が落ちている。ジュースの自動販売機には、カミキリムシ、コクワガタやゲンゴロウの仲間がくる。ある年はカブトムシの雌がいたことがあった。面白いのは、明かりに集まる虫を食べようとしている、シュレーゲルアオガエルやヤモリを観察できることだ。

この公開講座は、自由に遊びながら、集団の遊びを覚える絶好の機会になっていると考える。子どもたちは自由な遊びを通して、危険なものや、危険な状態に出会った時、いかに対処したら良いかを学ぶのがこのプログラムのよさである。私も、毎回新しい発見があり、新しい人との接し方を学んでいる。第1回目から変わっていないカリキュラムであるが、より楽しくしようとか、楽になるよう手助けをしたりとか、危険なことに規則をつくったりとかしないことが、「親子で夏の森を楽しもう」の根底にある限り、この講座は続くと考えている。

(伊藤ふくお)

子どもと自然とのかかわり

この公開講座は、天気や子どもたちの要望による変更はあるものの、12年間、ほぼ同じようなプログラムで構成し、実施されてきた。それにもかかわらず、リピーター率が高く、マンネリを招かなかった要因として、(1)豊かな自然のもと、さまざまな生きものや植物に出会えたこと、(2)森や川の風をうけながら、太陽と月のリズムにあわせて過ごし、時間の縛りが緩やかであったこと、(3)少人数での実施体制で、参加者同士また参加者とスタッフとのコミュニケーションと信頼関係が成立したことなどがあげられるだろう。

子どもたちが森や川で「発見」した生きものや植物に、「驚き」、「喜び」、本来、子どもたちがもっている「好奇心」をおおいに発揮してくれた。親子で楽しさを「共有」する時間をもてたことも含めて、自然と人間との相互コミュニケーションも成功したといえるだろう。生きものや自然の法則にしたがった地域の生態系を残すことは、子どもたちの心を揺さぶり、子どもたちの「感動」を生み出す源でもある。さらに、フィールドにおいては子どもたちが自分の責任において判断する場面が多くでてくるとともに、生きものの「生と死」にも直面する。子どもの成長過程において、自然のなかで過ごす時間そのものが、子どもの心の豊かさを育むことにおおいに関係しているように感じる。

引用文献

- 朝岡幸彦. 2005. 新しい環境教育の実践「子どもとおとなのための環境教育」シリーズ1－環境教育とは何か～目的・概念・評価. pp.11-29.高文堂, 東京.
- 河合隼雄. 1998. 子どもと環境. 環境情報科学, 27 (3), 1.
- 河合雅雄. 1990. 子どもと自然. 岩波書店, 東京.
- 河合雅雄. 2003. 森に還ろうー自然が子どもを強くする. 小学館, 東京.
- 北川尚史. 1994. 自然環境教育センターの概要. 「奈良教育大学自然環境教育センターの自

- 然」. pp.17-21.奈良教育大学教育学部附属自然環境教育センター, 奈良.
- 前迫ゆり. 1998. 奈良教育大学自然環境教育センター奥吉野実習林の植物社会学的研究 I. シラキーブナ群集ほか. 奈良教育大学附属自然環境教育センター紀要,2: 1-15.
- 前迫ゆり. 2000. 奈良教育大学自然環境教育センター奥吉野実習林の植物社会学的研究 II. クリーミズナラ群集ほか. 奈良教育大学附属自然環境教育センター紀要,3: 1-12.
- 前迫ゆり. 2002. 奈良教育大学自然環境教育センター奥吉野実習林の植物社会学的研究 III. ツガ-アカマツ群集ほか. 奈良教育大学附属自然環境教育センター紀要,5: 11-20.
- 前迫ゆり. 2007a. 幼児期からの環境教育-心の育ちを援助する-. 「平成18年度 文部科学省 教育改革推進モデル事業 幼児期からの環境教育会議 研究誌」. pp.11-16. 学校法人早出学園早出幼稚園, 愛知県.
- 前迫ゆり. 2007b. 環境領域の保育活動と保育士養成校における自然環境教育. 奈良佐保短期大学研究紀要,14: 63-81.
- 前迫ゆり・智原江美・石田慎二・中田奈月・高岡昌子・福田公教. 2004. 地域の子育て環境づくりに向けての保育者養成校の課題と視座——奈良県内保育所の実態調査を通して, 奈良佐保短期大学研究紀要, 12: 27-44.
- 前迫ゆり・李曉琳・中村祐子. 2008. 幼稚園における自然教育のとりくみ-留学生の「ネイチャーゲーム」実践と幼稚園の評価-. 短期大学と地域の連携を基盤とする専門職養成に関する総合研究. 平成18年度~19年度文部科学省 私立大学教育研究高度化推進特別補助「知の拠点としての地域貢献支援メニュー群」. pp.75-84.
- 前田喜四雄. 1991. 哺乳動物の足跡を求めて. 「奈良教育大学附属演習林の自然」. pp.42-46. 奈良教育大学, 奈良.
- 奈良教育大学附属演習林の自然研究班(編). 1991. 奈良教育大学附属演習林の自然. 奈良教育大学, 奈良.
- 上野ひろ美. 1999. 発達の「場」をつくる——まなざしで向かい合う保育. 高文堂出版, 東京.



図1. 家族でテント設営(2004年7月24日, 伊藤撮影)



図2. コナラ・クヌギ林に囲まれたテントサイト(2006年7月22日, 前迫撮影)



図3. 燃料のまきを割る親子(2005年7月22日, 伊藤撮影)



図4. それぞれの家族がかまどの準備(2007年7月27日, 伊藤撮影)



図5. 川原樋川(かわらびがわ)で川遊び(2004年7月23日, 伊藤撮影)



図6. 親子でカヌー(2005年7月24日, 伊藤撮影)



図7. 川原樋川の河原で子どもが見つけたほ乳類の骨格(2006年7月22日, 前迫撮影)



図8. 包丁でタマネギのみじん切りをする子どもたち(2007年7月27日, 伊藤撮影)



図9. 餃子づくりをする子どもたち(2004年7月23日, 丸山撮影)



図10. ブラックライトに集まる昆虫の観察(2006年7月22日, 前迫撮影)



図11. キャンプサイトの燈火にやってきた雌雄のミヤマクワガタ(2006年7月27日, 前迫撮影)



図12. スギ林で伐採体験をする参加者(2007年7月29日, 伊藤撮影)



図 13. 樹幹解析のための円盤(1 m毎に樹木を輪切りにする)を伐る参加者(2007年7月29日, 伊藤撮影)



図 15. 奈良県で三番目に大きいトチノキ。参加者は樹洞に入ったり、木に登ったりして大きさを実感(2004年7月24日, 丸山撮影)



図 17. 奥吉野実習林の紫色のホウキタケ類(2006年7月22日, 丸山撮影)



図 14. 十坪平でミズメの樹皮を剥ぎ、サロメチールのにおいを確認する子どもたち(2006年7月27日, 前迫撮影)



図 16. シャクヤク沢のイワタバコ。残念ながら、花は咲いていなかった(2000年7月22日, 前迫撮影)



図 18. シャクヤク沢のナガレヒキガエル(2004年7月24日, 丸山撮影)



図 19. テントサイトのクヌギ林にかけられたハンモック, 子どもたちは朝な夕なに揺られてくつろぐ(2006年7月21日, 丸山撮影)



図 20. 発表準備をする子どもたち(2004年7月24日, 前迫撮影)



図 21. 子どもたちによる「森の発表会」, 子どもたちが体験し, 観察した森林や生きものについて標本を見せながら発表する(2006年7月22日, 前迫撮影)



図 22. 楽しい「昆虫は忍者なり、むいむいくん参上」の話をする伊藤氏(2006年7月23日, 前迫撮影)



図 23. 森で採集したばかりのキノコを手話を丸山氏(2006年7月22日, 前迫撮影)



図 24. ネズミの標本を見せながら奥吉野実習林のほ乳類の話をする前田先生(2006年7月21日, 丸山撮影)



図 25. 葉にポスターカラーを塗って作品づくり。三原色だけでいろいろな色をつくる(2006年7月22日, 前迫撮影)



図 26. ネイチャーゲーム「コウモリとガ」を楽しむ子どもたち(2006年7月22日, 前迫撮影)



図 27. 屋外の階段と竹を活用した流しそうめん。竹は当日、節をぬいて準備をする(2005年7月24日, 伊藤撮影)



図 28. 公開講座最終日の記念撮影(2007年7月29日, 伊藤撮影)